

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21401012

研究課題名（和文）アフリカの地域紛争にみられる新兆候に関する研究：ナイジェリアの事例を中心に

研究課題名（英文）New understanding of regional conflict in Africa

研究代表者

島田 周平（SHIMADA SHUHEI）

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

研究者番号：90170943

研究成果の概要（和文）：

アフリカ各地で起きている地域紛争は、地域の歴史や文化を反映した特殊性を持っている。しかしそれらは、最近のグローバルな経済社会変動の中で起きているという同時代性も持っている。アフリカ諸国の多くは、1980年代に、債務問題から脱却するために構造調整計画を実施した。ベルリンの壁崩壊は、西側諸国のアフリカ地域に対する関心を低下させたものの、アフリカの政治的民主化を推し進める効果をもっていた。そして2001年9月11日以降の対テロ戦争は、アフリカ諸国に一層の民主化と市場自由化を迫った。

本研究で私は、ニジェール・デルタ地域の歴史と最新の地域紛争の実情に関する研究を行った。その結果、長期に及ぶ政府による無視や圧政がこの地域の人々、とりわけ若者達に絶望的感情を抱かせてきた経緯が明らかになった。また、日常生活を破壊された農漁民は、脆弱性を増大し、そのことが一層多国籍企業や政府に対する反撥を強めてきたことも明らかとなった。そして、人々の不満のはけ口は、地元の伝統的権威や政治家にも向けられるようになってきた。伝統的権威や政治家は、人々の苦しみを和らげるために仲介者としての役割を期待されたがうまく機能しなかった。時あたかも、シエラレオーネ、リベリア、コートジボワールで内戦が終熄し、西アフリカで大量の武器が流通する事態が生じ、これが紛争をより過激なものとした。

以上の結果は、ニジェール・デルタで頻発する「新しい紛争」が、地域的要因とグローバルな要因との相互作用や相乗作用の結果起きてきていることを示している。2009年に開始された（停戦のための）恩赦政策の成否も、このような地域的および国際的要因の両方から判断する必要があると思われる。

研究成果の概要（英文）：

Conflicts in Africa these days have its uniqueness which reflects local political culture and historical background; however they also have coincided with recent global socio-economic change, which reflects rapid socio-economic change since 1970s. Many African countries have adopted quick-acting remedy for getting out of debt problem, the Structural Adjustment Program (SAP) in 1980s. The collapse of Berlin's Wall had effect to refrain the Western Countries' concern from Africa, but it had effect to drive forward African political democratization. And the Anti-Terrorist War after the 9.11 of 2001 has

accompanied with more resolute request of democratization and market deregulation to African countries.

I examined historical background of the Niger Delta and studied recent violent conflict in the area. It has become clear that long time neglect or even suppressive action of the Federal Government has aggravated despairing feeling of the people, particularly of the youth. And the livelihood destruction of fishermen and farmers has increased vulnerability of their societies which intensify the protest against multinational oil companies and the Government. An outlet of accumulated frustration began to turn to the traditional authorities and politicians as well who behaved as mediators to mitigate the agony of people but failed. The abundant arms circulated in the Western Africa after cease fire in Sierra Leone, Liberia and Ivory Coast facilitated to violate the conflicts.

This shows that the recurrent 'new conflicts' in the Niger Delta should be understood as collaboration or catalytic reaction occurred between local factors and globalized impacts. The efficacy of amnesty policy (to ceased fire) started in 2009, therefore, should be examined from both of local and international factors point of view.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2011年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
年度			
総計			

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：ナイジェリア、地域紛争、脆弱性、地域問題、アフリカ

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降のナイジェリアは、政治学者ファロラ氏が言うように「政治体制や社会の崩壊、宗教的暴力の過激化という深刻な事態に突入し、かつてルワンダが経験した悲劇のシナリオを辿る瀬戸際に来ている」状態となった (Falola, Toyin (1998) *Violence in Nigeria*. University of Rochester Press, 386頁)。川端もまた、軍政末期のナイジェリアが、聖職禄国家から略奪国家に移行したと捉えていた (川端正久・落合雄彦編(2006)『ア

フリカ国家を再考する』晃洋書房 389頁)。多くの政治学者が、ナイジェリアが「失敗国家」や「崩壊国家」になる可能性を指摘しはじめた。これらの動きはかつて研究代表者が予測した地域紛争の地域的細分化や北部イスラーム圏における宗教運動の新展開の予測の範囲をも超えるものであった (拙著(1992)『地域間対立の地域構造—ナイジェリアの地域問題—』大明堂 237頁)。

アフリカにおける 1990 年代の地域紛争、地域問題の激化は、1989 年のベルリンの壁の崩壊に始まる東西冷戦構造の終焉や債務問題解決のために実施された構造調整計画

(SAP) という、世界的な政治・経済的变化と無関係ではない。ナイジェリアの地域紛争もこの時代性を共有している。しかし一方、かつてビアフラ内戦(1967-70 年)を経験したナイジェリアは、アフリカの中では特異な政治体制(連邦制、予算配分制度、全国的政党制など)を持っており、それを反映して地域紛争も他のアフリカ諸国とは異なる展開を示しているといわれている。このような一般性と特殊性を孕みながらナイジェリアの地域紛争は近年過激化してきているといえる。

ナイジェリア南部のニジェール・デルタ地域における重火器を使った過激な地域紛争や、北部のイスラーム圏において過激化するボコハラームのような宗教運動は、ナイジェリアのみならず西アフリカ全体に波及する影響力を持っており、その原因を探ることは、重要な課題となっている。

2. 研究の目的

政治学者たちは、近年のナイジェリアにおける地域紛争がこれまでのものとは質の異なるものに変転してきているのではないかと考えはじめている。本研究で明らかにしようとしているのはまさにこの点である。

地域紛争の国際性とローカル性の理解

ファロラ氏は、北部イスラーム圏における宗教運動は分派化が進み、伝統的支配者層も統制できない過激なものになっていることを明らかにした。また、イケレグベ博士は、南部ナイジェリアのニジェール・デルタ産油地帯における反政府・反石油企業運動の一部は、若者武装集団が主導権を握り、旧来の指導者たちの統制が利かない過激なものになってきていることを明らかにした(Ikelegbe,

A. (2006): Beyond the threshold of civil struggle: Youth militancy and the militianization of the resource conflicts in the Niger Delta Region of Nigeria, *African Study Monographs*, 27(3) 87-122 頁)。前者は国際イスラーム運動の動向と関連を持ち、後者は世界の環境 NGO 運動や反多国籍企業運動とつながりを持っており、武装闘争に使う武器の国際化も進んでいる。このように、地域紛争は、国際的要因と強いつながりを持ちつつ比較的狭い地域の中で苛烈に戦われているのである。

地域紛争は、伝統的権威をめぐる争いや武力闘争の主導権をめぐる争いなどとも絡み合いつつ、多様な歴史的、宗教的、文化的背景を持つ複合的な民族共生社会の中で生じている。地域紛争のグローバル性は、このような複雑なローカル性の理解なしには解明できない。本研究では、この点を明らかにすることも目的とした。

農村社会の脆弱性

ワッツ教授は、経済のグローバル化のなかで北部ナイジェリアの農村部が変容し、その過程で一部の小農が脆弱性を増大させていることを明らかにした(Watts, M. (1983): *Silent violence: Food, famine and peasantry in Northern Nigeria*. Berkeley, Univ. of California Press. 687 頁)。そのような脆弱性増大が北部の宗教運動と関連を持っている可能性を示唆するのがファロラ教授である。またイケレグベ博士の研究も、デルタ地帯の反政府・反石油企業運動にみられる武装化や過激化と、この地域

の社会の脆弱性増大とが関連性を持っていることを示唆している。

このように1990年代以降のナイジェリアにおける地域紛争は、グローバルな変化とローカルな要因との関わり合いの中で、それ以前の紛争とは異なる性格を持つものに変化してきていることを示唆する研究が多い。本研究の狙いは、近年の地域紛争が持つグローバルな性格の特質を、ローカルなレベルから捉え直してみる点にある。その場合に、ローカルな規定要因の一つとして地域社会の脆弱性増大といった問題にも焦点をあてて分析をすることを目的とした。

3. 研究の方法

当初考えていた現地における宗教家、地域運動家、旧政治家を対象とした直接インタビューは、ナイジェリアの政治状況の悪化のため困難になった。このため、調査の重心を現地での資料収集や現地研究者との情報交換に移して調査を実施した。

ニジェール・デルタ地域における地域紛争研究を精力的に推進してきているナイジェリアのオバフェミ・アウオロウォ大学のウケジェ博士とスウェーデンのウプサラにあるアフリカ研究所のオビ博士、そして北部ナイジェリアのイスラーム運動に関する研究の第一人者であるオックスフォード大学のムスタファ博士らとは、長期滞在の機会を使って密接な情報交換を行い、様々な資料と情報を得た。とりわけオビ博士からは、個人的インタビューやセミナーを通して最新の情報を得、さらにはインターネットによる運動家へのインタビューなどの方法についてアドバイスを得た。

ナイジェリアの国際問題研究所の研究者やイバダン大学のウド教授、さらにはオバフェミ・アウオロウォ大学のアデソジ博士やイケレグベ博士からは、ニジェール・デルタ地

域の歴史的特殊性、地域紛争と伝統的支配者との関係、旧政治家の役割などに関する聞き取りを行った。ファロラ教授の教え子でナイジェリアの社会研究の若手のホープであるアデソジ博士からは、伝統的支配者と政治家およびマスコミとの関係に関する最新の研究動向についておおくの示唆を受けた。

イバダン大学のアフリカ研究所内に設置された「平和と紛争研究センター」や、ドイツのバイロイト大学の大学院アフリカ研究科、オランダのライデン大学にあるアフリカ研究センターにおいて、アフリカの地域紛争に関する最新資料の収集と情報交換を行った。ライデン大学ではセンターの研究者と意見交換を行う一方、日本におけるアフリカ研究を紹介しつつ地域紛争研究の中間報告を行いそれに関するアドバイスを得ることができた。

4. 研究成果

ナイジェリアのオバフェミ・アウオロウォ大学、国際問題研究所、イバダン大学、オランダのライデン大学のアフリカ研究所では、小規模な研究会で研究発表を行い、意見交換を行った。

また、研究最終年には、オバフェミ・アウオロウォ大学のウケジェ博士とオックスフォード大学のムスタファ博士の二人を日本に招聘し、京都大学で国際シンポジウムを開催し、本研究の成果の公表に努めた。その時の両者の発表スライドと要旨については科研最終報告書に掲載した。

また、研究代表者の研究成果論文である「ニジェール・デルタ地域の地域

紛争に関する試論的考察」についても、最終報告書に掲載した。この成果の一部は、学会誌に投稿する一方、本年8月にドイツで開催される国際地理学連合（IGU）の地域大会で公表の予定である。

「ニジェール・デルタ地域の地域紛争に関する試論的考察」では、1990年代に過激化してきたといわれるこの地域の紛争原因が、植民地支配以前の奴隷貿易時代に遡ることができる歴史的背景を持っており、その基層の上に、独立後のナイジェリアの連邦体制下でのこの地域の周辺化、政治的疎外、さらには石油開発に伴う深刻な環境破壊と、それに抗議する住民に対する軍事政権の強権的対応、周辺諸国における地域紛争の「終熄」による武器の流出、そして伝統的秩序の破壊等、様々な要因が重なって起きてきていることを指摘した。

また、この論文では、地域紛争の担い手として注目されている「自警団」的若者集団に焦点を当て、古くから村落社会に存在してきた自警団組織と、地域紛争の担い手である「自警団」的若者集団との関連性についても最新の研究成果をもとに考察を加えた。その結果、両者は異質なものである可能性が高いこと、さらに後者の中には設立当初は合目的組織として近代的性格を持つものもあったものの、地域の有力者や政治家と関係を持つうちに政治に取り込まれ、変質するものが多いことも明らかとなった。その結果、ごく一部の有力者や政治家の私兵的集団になるものや、逆にそのどちらの影響も及ばない、独立性が高く且つ極めて過激な若者武装集団に変容するものなど、多様化を遂げつつあることを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ①島田周平 「アフリカの農家世帯の脆弱性をどう捉えるか」杉原薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生編『講座 生存基盤論 1 歴史のなかの熱帯生存圏』京都大学学術出版会 2012、415-437。
(査読有り)
- ②島田周平 「アフリカの小規模農民の脆弱性について考える」『季刊地理』63-2、2012、(近刊) (査読無し)
- ③島田周平 「ナイジェリア産油地域における地域紛争の特徴：最近の研究成果と解決への模索」『季刊地理』63-1、2012、p. 52
(査読無し)
- ④島田周平 「新しい専門知の創出を」『地域研究』12-2、2012、82-83。
(査読無し)
- ⑤島田周平 「脆弱性研究から考える社会のレジリエンス」『建築雑誌』127-1629、2012、pp. 20-21。
(査読有り)
- ⑥島田周平 「ザンビアの1農村における最近の脆弱性の変化」(梅津千恵子編『社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス』総合地球環境学研究所 平成22年度 PR 研究プロジェクト報告、2011、pp. 266-275。 (査読無し)
- ⑦島田周平 書評：川端正久・武内進一・落合雄彦編著『紛争解決：アフリカの経験と展望』アフラシア叢書 ③、ミネルヴァ書房、2010年、311頁 『アフリカ研究』78、2011、pp. 81-83。

(査読有り)

- ⑧島田周平 「脆弱性の視点からみるアフリカ農業・農村考」 『アフリカ研究』 76、2010、pp. 43-45. (査読有り)
- ⑨島田周平 「ナイジェリアの地域紛争に関する新しい研究動向」 日本地理学会 2010 年春季学術大会発表要旨集、2010、p. 194. (査読無し)
- ⑩島田周平 「アフリカの民族問題と新しい地域紛争」 『歴史と地理』 No. 623、2009、pp. 43-50. (査読無し)
- ⑪島田周平 「脆弱性の視点から見るアフリカ農民・農業考」 『アフリカレポート』 49、2009、pp. 3-7. (査読無し)
[学会発表等] (計 10 件)
- ①島田周平 「アフリカの小規模農民の脆弱性について考える」 東北地理学会 2011 春季大会 (東北大学片平さくらホール) (2011. 5. 14)
- ②島田周平 「アフリカ研究最前線 『可能性に生きる』」 (2011. 2. 19) アフリカ研究資料センター
- ③島田周平 'African studies in Japan and in Kyoto University' African Studies Centre, Leiden University (2011. 2. 14)
- ④島田周平 「脆弱性をどう捉えるか: レジリエンスの理解に関連して」 国際開発学会 21 回全国大会 早稲田大学 (2010. 12. 4)
- ⑤島田周平 「ナイジェリア産油地域における地域紛争の特徴: 最近の研究成果と解決への模索」 東北地理学会秋季大会 北海道学園大学 (2010. 9. 18)
- ⑥島田周平 「ジェール・デルタの地域紛争: 最近の研究成果と解決への模索」 JETRO Lagos Office (2010, 8. 25)
- ⑦島田周平 「多文化共生と地域紛争: アフリカで起きていること」 東北学院大学 社会福祉研究所 オープンセミナー

(2010. 7. 3)

- ⑧島田周平 「地域紛争と環境問題: ナイジェリア産油地域で起きていること」 京都大学 G-COE 「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」 イニシアティブ 4 研究会 (2010. 4. 19)
- ⑨島田周平 「ナイジェリアの地域紛争に関する新しい研究動向」 日本地理学会 春季学術大会 (2010. 3. 28)
- ⑩島田周平 「アフリカの農村開発に求められていることー脆弱性の視点からの提言ー」 日本国際地域開発学会 2009 年度秋季大会 (2009. 11. 28)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島田周平 (SHIMADA SHUHEI)
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授
研究者番号: 90170943